

奏



2013 AUTUMN Vol.40



公益財団法人 日本室内楽振興財団

100年もの間続いてきた 音楽学校を保有する企業として、 文化的活動には前向きに取り組んでいきたい



左：日下部さん 右：角さん

記録的な暑さが続いた今年の夏。その酷暑をようやくひと段落させてくれた秋雨が降る九月初旬の午後、音楽評論家の日下部吉彦氏が阪急阪神ホールディングス本社をお訪ねし、代表取締役社長の角和夫氏に、音楽の魅力や街づくり、メセナ活動への思いなど、幅広くお話を伺いました。この春、大阪駅前に誕生すると同時に新たな大阪の顔となった「グランフロント大阪」の話題でも大いに盛り上がりました。

宝塚歌劇団の生徒たちの卒業時、感謝と激励の思いを込めて曲をプレゼントしています。

角

日下部 本日はお忙しい中、誠にありがとうございます。さて、早速ではございますが、角社長はお仕事の傍ら、作詞や作曲を手がけておられると伺ったのですが、素晴らしいことですね。そうした意味では、音楽の専門家といっても良いのではないのでしょうか。

角 いえいえ。音楽の専門家などとは、怖れ多いです（笑）。ただ、ジャンルを問わず音楽は、昔から好きですね。

日下部 なるほど。
角 作曲するのは好きで、今でも手掛けていますが、作



角さん

にかけるのですが、作詞がなかなかできない。それでも頑張つて、これまでに二、三曲、詞も書きましたが、なかなか思うようなものはできないですね。

日下部 なるほど。作曲の方が得意というわけですね。

ワークというか、よくそんな難しいことをされましたね（笑）。いやあ、お見事です。ところで、その百周年記念の曲を含めて、これまでどれくらい曲を作られたのでしょうか？

角 六曲くらいだと思います。

日下部 作曲する時は、ピアノに向かって作ることが多いのですか？



日下部さん

角 今は、そうですね。でも、最初に作った曲はギターで作りました。

日下部 へえ。

角 最初に音楽に興味を持ったきっかけは、姉が家でピアノを弾いていたというのがありますが、自分から能動的に音楽に向かい合ったという意味でのきっかけとしては、中学時代に買ったもらったエレキギターだと思います。そのエレキギターを手に入れたのが嬉しくて、毎日毎日練習をして、

高校時代には友人たちとバンドを組んで、当時流行りだったビートルズやベンチャーズなどをコピーして演奏していました。

日下部 となると、エレキギターが角社長の作曲のルーツなんですね。

角 そうなりますね。ただ最近、ギターを弾くことがほとんどなくなりました。で、ピアノを使って曲を作ることが多いのですが…。

日下部 そのように、今でも仕事の傍らで作曲をされているということですが、本当に音楽を愛されているんですね。

角 そうですね。音楽に関わっている時間というのは、私にとって、とても貴重で楽しい時間となっています。ただ、近頃は趣味で好きなように作曲をするというよりも、先程もお伝えしたように、歌劇団の生徒たちの卒業時に、これほどの頑張りに対して、感謝と激励の思いを込めてプレゼントすることが多いですね。

日下部 それは生徒さんにとって、なによりプレゼント



宝塚音楽学校創立100周年記念讃歌CD

角 そうですね。今は、宝塚のトップスターが退団する時、最後のショーに使う曲などを、作ったりしています。つい最近では、宝塚音楽学校百周年に関わる曲を作りました。これは、記念イベントの中で、歌劇団の日舞の大御所である松本悠里が踊る祝舞のための曲だったので、依頼された時、てっきり私が書いた曲に詞をつけていただけののだと思っていたら、全く違ったんですよ。

日下部 と言いますと？

角 作詞は宝塚歌劇団で「ベルサイユのばら」などを担当した植田紳爾という演出家を書いて、私は私で曲を作りました。そして、それをまた別の作曲家が上手にアレンジして作ってくれるというわけですよ（笑）。「百年の道」という曲なのですが、かなり異色な方法なのではないでしょうか。

日下部 へえ、それぞれ別々

に書いたものをついにまとめていくのですか。それは大変な作業ですね。

角 そうですよ（笑）。それに加えて、今回の曲は、二名で作曲をしたので、かなり大変な作業となりました（笑）。

日下部 「百年の道」のCDには、岸「眞さん」と吉田優子さんのお名前があつて、角社長のお名前は記載されていないようですが…。

角 私は作曲する時には岸「眞」という名前を使っているんですよ。吉田優子というのは、宝塚歌劇団の作曲家です。

日下部 なるほど、そういうことなのですね。

角 この曲の創作作業は、特に複雑でしたよ（笑）。例えば、私が書いた曲の一部分を切り取ってイントロに盛り込んでもらう。そして、途中の部分がどうしても合わなくなってきたら、またそこに合うような曲を作るといって感じて、非常に複雑で難しく、吉田先生には大変お世話になりました（笑）。

日下部 素晴らしいチーム

PROFILE

敬称略

【日下部 吉彦】(聞き手)

1952年、同志社大学英文科卒業、同年朝日新聞社入社。
1958年、朝日放送に転じ、音楽番組プロデューサー、解説委員を経て、解説委員室長を歴任。現在音楽評論界の第一線で活躍中。大阪音楽大学客員教授。大阪国際室内楽コンクール&フェスタの審議委員長、フェスタ審査員長。

【角 和夫】

1973年、早稲田大学政治経済学部卒業、同年阪急電鉄株式会社入社。
その後、20年にわたり鉄道部門に所属。
1993年経営政策室に異動、1995年1月に発生した阪神・淡路大震災を受けて、被災した鉄道の復旧推進に参画。
2000年、阪急電鉄取締役鉄道事業本部長、2002年、常務取締役。
2003年、阪急電鉄代表取締役社長(現職)。2006年、阪急阪神ホールディングス代表取締役社長(現職)。

となるでしょうね。

角 それらの曲は、岸眞の名を使って、自分の名前を隠して作っているものですから、ほとんどの方は、私が作っているという事は知らないと思います。でも、正直に話してしまおうと、基本的には作るよりも聴く方が得意ですね(笑)。

理想的な沿線を作り上げるには、教育・文化・安心という三つの要素が必要。——**角**

日下部 ところで、現在も宝塚音楽学校の理事長を務めておられるんですよね？

角 はい。おかげさまで先日、百周年を迎えました。

日下部 それは素晴らしいことですね。おめでとーございます。

角 ありがとうございます。宝塚音楽学校と歌劇団を有することから、今ではすっかり伝統的に音楽が根付いた企業というイメージになっていますが、もともと弊社は鉄道会社ですから、音楽とはあまり関連性のある企業ではな

かったと思います。でも、歌劇団は、鉄道会社として重要な輸送需要増加のための大きな戦略となったのです。当時宝塚というエリアは、どこまでも田園風景が続く牧歌的な場所だったので、乗客数もそう多くはなかった。ですから、なんとか輸送需要を新たに作り出す必要性があったわけです。そのため、沿線の住宅開発を進めると共に、輸送需要拡大が望めるエンターテインメント的な要素も必要だと考えたわけです。

なりました。

日下部 なるほど。

日下部 プールが劇場となったというわけですか。それはすごい発想ですね。

角 また、新たな発想としては、出演者を呼んでくるのでは

日下部 なく、自ら舞台人を育てる学校を作ったことですね。宝塚歌劇の第一回公演は、一九二四年の四月に行われたのですが、その前年の七月に宝塚音楽学校を創設。その学校に若い女性を集めて、歌劇に必要なある歌とバレエを徹底的に教えました。それが百年もの間続いている宝塚音楽学校の始まりですね。

日下部 宝塚音楽学校の創設は、まさに創業者の小林三三さんの偉業の一つですよ。小林さんの自前主義というのでしょうか、人がやっていないことに対して、積極的に挑戦するというのは、非常に素晴らしいことですね。そうした精

神は、角社長も引き継いでいらっしゃるのではないですか？

角 歌劇の精神まで引き継いだかという点、ちょっと自信はないのですが……(笑)。しかしながら、歌劇というエンターテインメントは、やはり沿線を活性化させるための大きな決め手になったと思います。個人的には、理想的な沿線を作り上げるためには、教育・文化・安心という三つの要素が必要だと考えています。特に文化をその地域に根付かせるといのはとても重要なポイントだと感じています。そうした考え方は、弊社の伝統的精神に影響を受けているのかもしれないですね。小林三三は、歌

劇以外にも、一市二図書館という構想を打ち出していた時期があったのですが、これは残念ながら実現しなかった。ただ、小林三三が住んでいた池田市には、図書館があり、歌舞伎や民俗芸能などの資料や茶器などを展示する施設を作っていましたね。街の品格を高めるには、文化は欠かせないものであるという意識を持つていたことの現れだと思えます。

「グランフロント大阪」の誕生は、大阪の印象を大きく変えたように思います。——**日下部**

日下部 ところでこの春、梅田に「グランフロント大阪」というメガ複合施設を見事開業されましたね。誠にめでとーございます。あれはもはや複合施設というよりも、街そのものだと思います。本当に素晴らしいものを作られましたね。

角 ありがとうございます。おかげさまでナレッジキャピタルをはじめ、飲食店や物販の



商業エリアなど、非常に賑わいを見せております。駅前広場には、従来であれば商業施設などは設置できないのですが、広場を我々が管理する代わりに、飲食店や物販店などが作れるように規制緩和していただけたんですね。コンセプトや設計など、トータルして考えることができたので、とてもまとまりのあるエリアになったのではないかと考えています。今後はさらに緑を増やして、大阪に欠けているといわれる「うるおい」が演出できるようなエリアにしていきたいと計画しています。

日下部 やはり基本となるのは、そうした街づくりの精神



なく、自ら舞台人を育てる学校を作ったことですね。宝塚歌劇の第一回公演は、一九二四年の四月に行われたのですが、その前年の七月に宝塚音楽学校を創設。その学校に若い女性を集めて、歌劇に必要なある歌とバレエを徹底的に教えました。それが百年もの間続いている宝塚音楽学校の始まりですね。

日下部 宝塚音楽学校の創設は、まさに創業者の小林三三さんの偉業の一つですよ。小林さんの自前主義というのでしょうか、人がやっていないことに対して、積極的に挑戦するというのは、非常に素晴らしいことですね。そうした精

神は、角社長も引き継いでいらっしゃるのではないですか？

角 歌劇の精神まで引き継いだかという点、ちょっと自信はないのですが……(笑)。しかしながら、歌劇というエンターテインメントは、やはり沿線を活性化させるための大きな決め手になったと思います。個人的には、理想的な沿線を作り上げるためには、教育・文化・安心という三つの要素が必要だと考えています。特に文化をその地域に根付かせるといのはとても重要なポイントだと感じています。そうした考え方は、弊社の伝統的精神に影響を受けているのの

かもしれないですね。小林三三は、歌

劇以外にも、一市二図書館という構想を打ち出していた時期があったのですが、これは残念ながら実現しなかった。ただ、小林三三が住んでいた池田市には、図書館があり、歌舞伎や民俗芸能などの資料や茶器などを展示する施設を作っていましたね。街の品格を高めるには、文化は欠かせないものであるという意識を持つていたことの現れだと思えます。

「グランフロント大阪」の誕生は、大阪の印象を大きく変えたように思います。——**日下部**

日下部 ところでこの春、梅田に「グランフロント大阪」というメガ複合施設を見事開業されましたね。誠にめでとーございます。あれはもはや複合施設というよりも、街そのものだと思います。本当に素晴らしいものを作られましたね。

角 ありがとうございます。おかげさまでナレッジキャピタルをはじめ、飲食店や物販の商業エリアなど、非常に賑わいを見せております。駅前広場には、従来であれば商業施設などは設置できないのですが、広場を我々が管理する代わりに、飲食店や物販店などが作れるように規制緩和していただけたんですね。コンセプトや設計など、トータルして考えることができたので、とてもまとまりのあるエリアになったのではないかと考えています。今後はさらに緑を増やして、大阪に欠けているといわれる「うるおい」が演出できるようなエリアにしていきたいと計画しています。

日下部 やはり基本となるのは、そうした街づくりの精神

角 そうですね。東京は首都ですから、どうしても官の動きが強いように感じますね。東京に二極集中することで関

西は地盤沈下を起こしてしまつて、民だけではできなくなつて、官だけでもできない、学だけでもできないという状態に陥つて…。だから、産官学が連携して良い街を作ろうという動きになつたのだと思います。それが東京と関西の違いなのかもしれませんね。

日下部 今、産官学とおっしゃいましたが、御社の事業のように民の中に学があつたり、文化の要素が深く根付いているというのは素晴らしいことだと思いますね。



兵庫県立芸術文化センター

角 西宮市の「兵庫県立芸術文化センター」は、そうしたことを象徴する施設と言ええるかもしれませんね。あの施設が出来たことで、西宮北口のポテンシャルを確実に上げたと思います。

日下部 そうですね。
角 ポテンシャルが上がれば、おのずと西宮北口は住みたい街と意識されるようになります。さらに、西宮球場の跡

地に百貨店やシネコンなどの商業施設をつくることで、「芸術文化センター」との相乗効果もあつて、街は非常に雰囲気の良い環境へと仕上がつていった。

日下部 本当に西宮北口は人気の高い街となりましたよね。私もいささか「芸術文化センター」には関係しているのですが、あそここの運営方法はある意味とても関西流というか、民営流ですよ。それが非常に良い効果を上げています。典型的な例なのではないでしょうか。特に私などは、街に音楽があるというのは素晴らしいことだと思います。これは、角社長が作詞作曲されたということにも関係があるのではないかと…(笑)

角 昔、東京と大阪に「コマ劇場」というホールがありまして。あのホールの設立と企画・運営が小林三三の最後の仕事だったんです。美空ひばりさんなどの全盛期には非常に人気のあるホールだったので、時代と共に老朽化してきましたので、二〇〇五年に

の関西のオペラ人気もすごいですよね。以前は東京で五公演、関西では二公演という感じだったので、「芸術文化センター」では、東京を上回る公演数をもつてくる。これは、まさしく日下部さんのおかげのように男性ファンの増加が影響しているのだと思いますよ。



日下部 そうした傾向は、今までありえなかつたことですよ。ね。

角 そうですね。ハワイエドコーヒを飲んでいても、圧倒的に高齢の男性客が多い。本当に良い傾向ですよ。

日下部 この年齢層の方々は、時間もお金も教養もあつて、本当に良いものを知っている世代でもあります。なので、是非、この層の人達を惹きつけるようなことを計画して下さればと思うのですが、何かそうした戦略などは考え

「梅田芸術劇場」という名でリニューアルオープンしました。ミュージカルやコンサートを中心に上演していて、クラシックはしていなかつたのですが、せっかく立派な劇場なのだから、なんとかクラシックができるようなホールにしたいと考えて、音響反射板を設置するなどして整えました。まだまだ本格的にクラシックを開催するホールとしては物足りないですが、一応できるというホールにはなりました。



日下部 あれだけ立地の良い所にある立派なホールですから、ぜひとも積極的にクラシックコンサートを開催していただきたいですね。

角 手始めとして、大阪フィルハーモニー交響楽団と関西フィルハーモニー管弦楽団に依頼し、子ども向けの五百円で楽しめるワンコインコンサートを開催しました。収益金

の全額は、あしなが育英会に寄付するという趣旨でね。そのコンサートで、子ども達に指揮者の体験をしてもらつたりしたんです。みんな非常に楽しそうで、すごくいい笑顔が浮かぶんですね。その様子を見ていて、子どもの頃にこうした経験や感動を味わつたら、ずっと一生忘れないんじゃないかなと思つたんです。そんな貴重な経験を子ども達に提供できるようにホールを変えていきたいと思うようになりました。それはやはり、私自身が音楽好きということもあるのかもしれませんが、基本的には弊社の中に宝塚音楽学校というものがあつたから、そうした文化的活動が進めやすいというのがあるように感じますね。

文化を大切にする企業が増えれば、関西も「うるおい」ある都市に変化するのでは

日下部

日下部 今、ホールの話が出

日下部 今、企業にとつては大変な時代で、非常に厳しい情勢だと思つています。そうした背景の中で、このように文化事業に協力するというのは、大変難しいことなのではないですか？

角 そうですね。日下部さんがおっしゃるように、全体的な流れとして文化事業へのバックアップや社会貢献などは、減少していく動きにあるかもしれません。ただ、今、政府が計画している政策がうまくいけば、企業もそうしたことに貢献できる余裕も出てくるのではないのでしょうか…。

日下部 御社のように文化を大切にしている企業が増えてくると、関西も「うるおい」ある都市になるかもしれません。是非とも先駆者として、

今後も積極的な文化活動を続けてくださり、益々のご繁栄、ご活躍を期待しております。本日は、誠にありがとうございます。



音楽文化をささげよう

公益財団法人 サントリー芸術財団 音楽事業部長

佐々木 亮

一八九九年(明治三十二年)、サントリーは大阪の地で創業しました。以来百有余年、本業はいうに及ばず、文化・芸術活動に対する支援、スポーツ振興など多方面で、多彩な社会貢献活動を行っています。

なかでも今回は、「音楽文化をささげる」というスキームのなかで、音楽支援の側面から公益財団法人サントリー芸術財団の音楽事業部長・佐々木亮氏に筆を執っていただきました。



公益財団法人サントリー芸術財団は二〇〇九年に財団法人サントリー音楽財団とサントリー美術館を統合して設立され、さらに二〇二二年サントリーホールを統合して現在に至っています。コンサートホールと美術館を有し、音楽事業と展覧会事業を中心に活動する公益財団法人です。

【沿革】

一八九九年に大阪で創業したサントリーは、儲けの三分の一は社会に還元しようという利益三分主義を掲げて、早くから社会貢献活動に取り組んでいました。また創業者の鳥井信治郎は最初の製品赤玉ワインの販売促進の環として赤玉歌劇団を結成し各地で興行したり、戦後日本を元気づけるために新国民歌の作詞作曲コンクールを開催するなど、早くから音楽の力に着目していたよう

です。戦後最初の民間ラジオ放送開始に際しては「百万人の音楽」というクラシック専門の番組をスタートします。ワインやウイスキーなどの洋酒は文学・芸術など西欧文化と深いつながりがあり、日本になかった洋酒を根付かせるためには酒をとりまく文化も紹介しなくてはならない、酒は単に酔うためのアルコールではないということから、「洋酒天国」という企業広報誌の先駆も刊行しました。

記念して、日本における洋楽の発展の功労者を顕彰する音楽賞を創設し財団を設立します。民間初の芸術系財団として文化庁認可を受けました。日本人作曲家の活動支援にも力を入れます。技術を磨き創造力を高めて、世界に認められる作曲家や演奏家となろうとした音楽家たちに、日本で世界に認められる洋酒を造ろうと志した会社として、共感をもって支援の手を差し伸べようとしたのかもしれない。

た。大阪で先にザ・シンフォニーホールが建設される中、「百万人の音楽」の司会をされ、理事に就任頂いていた作曲家の芥川也寸志氏が、当時の財団理事長佐治敬三に東京にホールをと呼びかけたことがきっかけできたのが、サントリーホールです。優れた響きで音楽を聴けるだけでなく、初めて日本のコンサートホールとしてお酒も飲み、訓練されたレセプションによる「おもてなし」で、音楽を取り巻く満ち足りた時間を提供する場として一九八六年に開場し、以来のご来場者総数はまもなく千六百万人に達するところ

【事業内容】

主な事業としては顕彰事業

【プロフィール】

1980年 サントリー株式会社入社
人事、宣伝、生産、マーケティング、国際事業などを経て
2000年サントリー音楽財団事務局長
2009年から現職



チェンバーミュージック・ガーデン2013
ファイナルコンサート

として「サントリー音楽賞」、「佐治敬三賞」(チャレンジングで優れた公演企画対象)、「芥川作曲賞」(新進作曲家の登竜門)の三賞、助成事業として日本人作曲家作品を演奏する公演を応援する

「推薦コンサート」、出版事業として日本人作曲家の作品情報

を世界へ発信するためWEB出版される「日本の作曲家の作品リスト」、若手音楽家を育成するための「チェンバー・ミュージック・アカデミー」と「オペラ・アカデミー」、「子ども定期演奏会」や「カーネギー・キッズ」などのエデュケーション活動、国内外への作曲家への新作委嘱活動を行っています。

【コンサート事業】

主なコンサート事業としては、サントリーホールを舞台に行われる三つのフェスティバルがあります。室内楽を中心とする春の「チェンバー・ミュージック・ガーデン」では毎年ベートヴェン

弦楽四重奏全曲演奏会、初めてのの方も気軽に室内楽に触れるコンサートや若手演奏家のためのワークショップなどが開催されています。二〇〇七年に堤剛がサントリーホール館長に就任してから室内楽の振興にも特に力を入れるようになって

います。現代の音楽を中心とする夏のサマー・フェスティバルでは、演奏機会の限られる二〇世紀以降の新しい音楽や、演劇・ダンス・アートなどと音楽のコラボレーションといった、音楽の枠におさまりにくい様々な挑戦も行われています。公開の場で選考が行われるユニークな芥川作曲賞選考演奏会も期間中に開催

されます。秋のサントリーホール・フェスティバルではウィーン・フィルハーモニー・ウイーク・イン・ジャパンや内田光子さんのスペシャル・シリーズをはじめ国内外の超一流アーティストによる演奏会が目白押しです。

【震災復興に関連して】

東日本大震災後にウィーン・フィルから音楽を通じての復興に役立ててほしいと二億円の寄

付の申し込みがありました。サントリーホールディングス株式会社と同額を出捐し計二億円をもとに、二〇二二年四月ウィーン・フィル&サントリー音楽復興基金を創設。①ウィーン・フィル楽団員が被災地を訪れ演奏をする「子どものためのコンサート」(五年間継続、楽団員による仙台ジュニア・オーケストラ指導も毎年行う)②音楽を通じて被災地はもとより日本全国を元気にする活動に助成金を差し上げる「音楽復興祈念賞」(十年間継続、年間助成金総額二千万円、二部活動にはウィーン・フィル楽団員が参加・指導も行う)の二事業をスタートしています。昨年十一月には宮城県の高橋や公民館で演奏を行いました。楽団員自ら被災地の現状を見、演奏を通じて現地の若い世代と交流する活動に献身的に参加しています。

【今後の課題】

かつて美術館では、毎年ひとりの作曲家をテーマにして、自筆譜、ゆかりの品等の展示とミニコンサートを行う「音楽文化展」シリーズを開催していたこ



サマーフェスティバル2012
ミュージック・センター オープニングから
献花、献茶、献奏(フルーローズ)

とがあります。このような音楽とアートの融合する活動にも「芸術財団」として力を入れていきたいと考えています。昨年サントリーホールではブルーローズ(小ホール)を中心に音楽・アートとさまざまなパフォーマンスが同時多発的に進行するジョン・ケージ「ミュージック・サーカス」や、ホールの中にミニ

美術館が出現してウィーン楽友協会の資料展示と演奏会を行う「音楽のある展覧会」などの活動を行いました。また被災地を訪問して、子どもたちに美術を体感してもらおう出張授業や、被災地での展覧会開催などの美術による復興支援の取り組みも始めています。音楽の力、芸術の力を信じて、さらに活動を充実していきたいと思



美しい響きに導かれて…

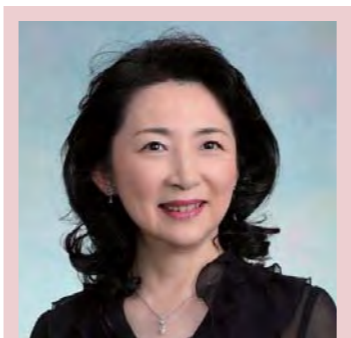
ピアノリスト
堀江 真理子

中学生になってまもなくの頃、私はピアノを弾くのがイヤになってしまいました。

そのとき先生から与えられた曲があまりに難しく、壁にぶつかってしまったのです。

三歳のころからピアノを始め、以来、その歳になるまで苦労したことはなく、毎日の練習は生活の一部となっていましたから人生初めての挫折でした。

不思議なもので長年共にし



【堀江真理子(ほりえまりこ)プロフィール】
東京藝術大学在学中にフランス政府給費留学生として渡仏。パリ国立高等音楽院を卒業。同音楽院第三課程(大学院)修了。プラハ国際音楽コンクール室内楽二重奏部門第1位、ジュネーブ国際音楽コンクールで銀メダル(1位なしの3位)並びに特別賞、ポール・ストレット賞を受賞。
1993~95年にかけてフォーレのピアノ曲と室内楽曲、全曲演奏会(8回)を開催。
パリでも「フォーレ生誕150周年記念コンサート」を行い高い評価を受ける。
また近年は明治から昭和初期の日本の作曲家の作品に深く興味を持ち、レパートリーを広げている。CD「1900年 啓かれた日本のピアノ」はレコード芸術誌の「特選盤」に選ばれた。2009年よりレクチャーコンサートシリーズ「日本のクラシック音楽の歩み」を開催中。
日本大学芸術学部、同大学院講師。
国際ピアノデュオ協会理事。

てきたピアノはもはや楽器ではなく、生きた個体の人格を持ち、私に常に寄り添い、私の心身の状態を映す鏡であり、全てを察している「相棒」のような存在になっていました。その「相棒」がまったく私の味方をしてくれないのです。

その乗り越えられなかった曲というのはショパンのバラード第二番で、ピアノの詩人と謳われるショパンの作品の中でも特

弦楽器の音が好きになり、家にあつた室内楽やオーケストラのレコードを夢中で何度も聴きました。

藝大の附属高校へ入学し、弦楽器や管楽器の音を毎日身近に聞けるようになったときは、心底から嬉しかったです。伴奏は頼まれれば全て引き受け、放課後は友だちとの合奏で楽しみました。

当時は授業として室内楽のクラスがなかったので、ピアノを専攻する学生にとっては自発的にチャンスを作らない限り、なかなか経験が積みません。従つてそれは貴重な時間でもあり最大の楽しみでもありました。大学へ進んでからもそうした状況はあまり変わりませんでした。

ラヴェルをはじめフランス音楽に強く惹かれていった私は、大学の途中でフランスへ留学し、パリ国立高等音楽院へ入学しました。

この学校の教室にはすべてフランスの作曲家の名前が付けられているのですが、師であるアルド・チッコリーニ先生のお部

屋は「サル・ラヴェル(ラヴェルの部屋)」でした!

この偶然に、ひそかに因縁めいたものを感じていたので、二年次の終わりの試験に課題曲が出され、それがなんとあの挫折したショパンのバラード第二番だったので!

こんなところである曲と再会するとは!しかし、以前私の前に大きく立ちほだかつていた壁はもう消えていました。ほろ苦い思い出から解放されて心の底からショパンの美しさを享受することができたのです。今では大好きなレパートリーの一曲になっています。

二年次になると室内楽の授業が必修になり、ジャン・ユポ先生のクラスで本格的な室内楽のレッスンを受けるようになりました。アンサンブルをおしてピアノの表現力の奥深さを学び、それは独奏曲の譜面の読み方にも大いに影響を与えました。

ピアノは鍵盤を押さえれば平均律に調律された音が鳴り、自分で音程をつくることは

に詩的な曲です。牧歌的な味わいの穏やかなメロディーの部分と、嵐のような激しい動きが交互に織りなすドラマティックで悲しくも美しい曲です。その嵐の部分の動きが当時の私にはとても難しく、ショパンの書いた音をつかむのがやっとで、とても音楽的な表現などできませんでした。先生が要求なさっているように弾けない自分に嫌気がさし、そのイライラの矛先は「相棒」に向けられました。そしてついに絶交宣言をしたのでした。「わたし、ピアノやめる!」と。

ピアノの蓋を閉じてから二ヶ月以上が過ぎていきました。あるいはもつと経っていたかも知れません。そんなある日、聞くとはな

しません。一方音程をつくる楽器では微妙な音程によっていろいろな表情や色をつくりだすことができます。

レッスンで「マリコ、そのGの音、もう少し低めに出して」と注意された時はびっくりしました。「暗く」とか「明るめに」という言葉はよく聞きますが低めに、と言われたのは初めてでした。でもユポー先生が示してくださった音は確かに低めのGになっていて弦の響きときれいに溶け合っていました。

ピアノの音を他の楽器と調



堀江真理子とVJの仲間たち

和させるには鋭敏な感覚と集中が必要で、常に相手の音を注意深く聴き取り、それに合わせて自分の音を考え選び

しに聞いていたラジオから流れてきた音楽。それは初めて耳にする曲で、弦楽器によって奏でられる清々しい響き、ある時は透明に、ある時は次々と色を変え、躍動感にあふれ、時には切ない旋律が心のひだに染み透つていきました。曲の進行とともに心が洗われ、胸が高鳴るのを抑えられませんでした。「これはいったい何という曲?」ドキドキしながら曲が終わったあとのアナウンスを待ちました。

それがラヴェルの弦楽四重奏曲との出会いです。その音楽は一条の光となって暗闇にいた私の足を照らし、まっすぐにピアノに向かわせてくれたのでした。この四重奏曲を聞いてから

ぬいていく。そうした耳の訓練が、響きに対する真のバランス感覚を養うのだということを感じました。

ある日フォーレのピアノ五重奏曲を練習していたときのこと、この曲は弦同士のユニゾンが多い曲なのですが、彼らがユニゾンの完璧な調和をめざして、納得する響きになるまで徹底的に音とボーイングのあわせをしていた姿には感動しました。自分はオクターブをあんなに神経を使つて弾いているだろうかと思つたとき、とても勉強になりました。

ソロとちがいで室内楽は複数の奏者がひとつの音楽をつくる共同作業です。それぞれの奏者が個性をぶつけあいながら融合し、対話をし、響きを溶け合わせ、心を寄り添わせてメッセージを表現する一体感、ソロでは味わえない喜びをもたらしてくれます。

室内楽は名曲の宝庫です。まだまだ弾きたい曲が沢山ありますので、これからも「相棒」と歩み続けていこうと思います。



音楽雑感



大阪大学大学院文学研究科教授

伊東 信宏

伊東信宏（いとう のぶひろ）プロフィール
一九八〇年京都市生まれ。大阪大学文学部卒業。同大学院修了（文学博士）。リスト音楽院（ハルビン）などに留学。大阪教育大学、大阪大学准教授などを経て、現職。著書「バルトーク」（中公新書、一九九七年）で吉田秀和賞、「中東欧東の回廊」（岩波書店、二〇〇九年）でサントリー学芸賞を受賞。近刊書に「バルトークの民俗音楽編曲」（大阪大学出版会）がある。

ゴツェ・テルチェフの楽師市場

筆者は基本的に不満が多くて不機嫌な人間だと思いが、稀には、やっぱり世界は素晴らしい、と思える時がある。ブルガリアの田舎で、ズルナ（トルコ由来のダブルリード楽器）を聴いている時間は、そういう例外的瞬間の一つだ。

ブルガリアの山間部の村。乾いた空気、高い空、埃っぽい道にヤギや羊の低い鈴音。それらをつんざくようにズルナの鋭い旋律が鳴りだし、持続音の伴奏が加わり、そして太鼓の低いビートが入ってくる。いつもほとんど根拠のない多幸感におそわれる。あのビリビリと痺れるようなズルナの音とドラムの絶妙のリズムが脳内の快感物質を誘発する刺激にでもなるのだろうか。どうもあの音はクセに

なる。

今年もズルナを聴いてきた。ブルガリアの首都ソフィアから南の方角に約三時間、ゴツェ・テルチェフという街の近くである。この街は人口二十万人程度。一九五二年以前はネヴロコプと呼ばれていたが、今は革命の戦士ゴツェ・テルチェフの名をそのまま街の名としている。中心部にはビルも建ち、銀行やカフェなどもあつて、周辺の村々の中核としての機能を果たしている。

ここに月曜になると市が立つ。道の両側に屋台が並んで、そこでもちやだとか日曜大工の工具だとかアクセサリーとか古着とか、まあ日本にもありそうなものが売られている。その一角にコーヒーショップがあつて、店内



ゴツェ・テルチェフの月曜日（筆者撮影、2013年4月）

（というか軒先の路上あたり）にたむろする男たち。彼らは地元ではよく知られたズルナ・バンドの奏者、リマノフ兄弟たちである。彼らが市の日にはここに居ることを街の人たちは知っていて、結婚式で演奏してほしい、という

ような頼みがあるときはここに交渉に来る。今では携帯電話で簡単に連絡のつく楽

師たちも多いが、このズルナ

奏者たちは、まだこの楽師市場とでも言うべきシステムを捨てていない。つまり、音楽が必要な時は、直接楽師に会いに行つて、交渉して、当日演奏しに来てもらう、というきわめてアナログで非バーチャルで確実なシステムである。日本に居ると、若者はCDなど買わなくなつて、ネットにアップされているものを適当に拾つてきて聴く、というような音楽との「軽い」付き合いばかりがクローズアップされるのだけれど、ここにはまだこんなに古典的で濃い音楽流通のシステムが生きているのだ。

そうやって雇われたリマノフ兄弟たちが実際に演奏するのを聴いたのは、ゴツェ・テルチェフから少し北西にあるブ

レズニツァという村での結婚式である。村といっても人口は三千人余りもあり、かなり大きい。そして昔から大部分がポマックと呼ばれるイスラム教徒だ（「ポマック」については以前もこの欄で触れたが、宗教以外の点ではブルガリア人とほとんど見分けのつかない少数民族である）。

バンドの編成は、ズルナ四本に太鼓三人。父と息子、そして従兄弟たちによる構成で、要するに家族でしかも男性ばかりである。数年前にも彼らの演奏を聴いたのだが、いつの間にか彼らは制服を新調したらしく、揃いの上着だ。けれど演奏は、以前と変わらず、格式張ったところはない。この日は、花嫁家から花嫁家への行進を行う日で、家の前でズルナが鳴り出すと親戚や友人たちがぞろぞろと集まりだし、バンドの先導でゆつくりと行進が始まる。

花嫁家から花嫁家へのプレゼントとして羊が一頭用意されている。羊は角にリング



プレゼントの羊。角にリング、額にお札、身体にはスプレー。（筆者撮影、2013年4月）

が刺してあり、額にはお札が貼付けられ、そして身体に赤いスプレーで大きな線が入れてあり、これはどうやら十字架を表しているらしい。羊も一緒に進行するのかと思つたら、トラックがやってきて荷台に乗せられた。

行列している道に車が近づいてくると、リーダーはズルナで「ピーポーピーポー」というパトカーの真似をしたりする。一杯呑んで機嫌の良くなった親戚のおじさんが、行進の途中でバンドに一曲リクエストしたりすることもあ

たちは彼の耳元でリクエストされた曲を奏し、彼が握っていたお札をバンドリーダーのポケットにねじ込むと、また行列が進み出す。いずれにしても、音楽はノンストップで、リーダーがちよつとキツカケを出せば他の奏者たちは見事に反応して、リズムやテンポが変化してゆく。

数百メートル離れた花嫁の家の前に着くと先ほどのトラックから羊が降ろされて、花嫁の家の門の前でゲルグルと三回引きずり回される。これがこの羊をめぐる儀礼の全てで、終わると花嫁家に結納として引き取られて行つた。その様子を門の上のバルコニーに、花嫁側の親戚たちが鈴なりになつて見ている。門は閉ざされていて、彼らはその外には出て来ない。花嫁側の代表が門の中に入れてくれ、と呼びかけるが、追い返される。じゃあ、お金をだすから入れてくれ、というが、少なすぎると断られる。そういうやりとりを経て、最終的に合意が成立し、



行進の途中でリクエストの1曲（筆者撮影、2013年4月）

ようやく花嫁側の行列が家の中に吸い込まれて行く。昔ながらのやり方だそうだ。

この間、ズルナ・バンドは、その場に応じて曲種を変えながら、見事に儀式をリードしてゆく。レパートリーは、古くから伝わる民俗音楽や、オリエンタルな歌謡曲から、最新のヒット曲まで自由自在。けれど、身体の奥から突き上げてくるような悦びと一抹の切なさだけは共通している。こんな鄙びた音楽でも、洗練の極みのようなジャンルであっても、惹き付けられるのは結局これなのだ。

史上最強の審査員団の下す結論は

音楽ジャーナリスト
渡辺 和

第六十二回ミュンヘンARDコンクール・ピアノ三重奏部門レポート

去る九月五日から十四日まで、今年で六十二回目となるミュンヘンARD国際音楽コンクール、所謂「ミュンヘンコンクール」が開催された。今年は六年ぶりにピアノ三重奏が科目に挙がり、世界から二十三団体六十九名の若い音楽家がバイエルンの古都に集まった。否が応でも来年の第八回大阪国際室内楽コンクール第二部門の行方を占うことになるこの世界最大のピアノ三重奏専門大会の様子を速報する。

◆貴重なピアノ三重奏のコンクール

そもそもピアノ三重奏というジャンルを扱うメイジャー級の国際コンクールは殆ど存在しない。ミュンヘンとメルボルン、それに大阪くらいである。メイジャー級とは、運営予算や参加団体数がある程度以上の規模で、安定して開催されている大会ということ（主催者がチェロを含む渡航費を負担するのは大阪とメルボルのみだ）。本気でピアノ三重奏のキャリアを目指す若者たちとすれば、極めて貴重な大会だ。

とはいえ、ミュンヘンは二十数科目から数年毎に四科目が選ばれ同時進行する「コンクールのデパート」で、メルボルンも弦楽四重奏部門と同時に開催。大阪はご存じのように第二部門の扱いは年度によって様々で、ピアノ三重奏に限る回もあれば、次回のようになりピアノ四重奏も含めた大会になることもある。つまり、「ピアノ三重奏」と呼ばれるピアノとヴァイオリン、チェロのアンサンブルに限定し単独開催される国際コンクールは、厳密に言えば皆無なのだ。

まない地域大会規模コンクールとしては、グラーツのシューベルト&現代音楽コンクール、オランダのチャールズ・ヘンネ室内楽コンクール、ウィーンのハイドン・コンクールなど、ヨーロッパにいくつか存在している。他文化圏での開催は、メルボルンが本大会の中間年に開く環太平洋大会くらいしか見当たらない。

◆ピアノ三重奏の難しさ

そもそもピアノ三重奏というジャンルは、若者が集まって長い時間を練習に費やし芸を世に問うには向いたジャンルではないのだ。身も蓋もない言い方になってしまいが、名曲はそれなりの数がありジャンルとして存在してもらわねば困るものの、プロの音楽家が専念するにはマーケット規模が小さ過ぎるのである。

実際、過去の名ピアノ三重奏団のほぼ全てが、その時代の最高のヴァイオリニストと

チェリスト、それに最高のピアノリストが組んだソリスト集団。カザルス・トリオもピティアゴルスキー・トリオも、超大物独奏者の存在が前提だった。二十世紀の現在、世界で最も有名なピアノ三重奏団はアルゲリッチ・クレメル・マイスキーだろう。日本でも最も人気の高かったピアノ三重奏団が堤剛・海野義雄・中村絃子トリオだったことは万人の認めるところ。

室内楽業界には、「ピアノ三重奏を弾き続け、マンハッタンにアパートと、ストラディヴァリのチェロと、ニューヨーク州の農場を所有したチェリストは、ボザール・トリオのグリーンハウスのみ」という冗談のような伝説が流布している。要は、本当に商売になった常設ピアノ三重奏団は過去にボザール・トリオひとつしかないということだ。三人の若者が世界にひとつあるかないかのポジションを目指すなら、さっさとソリストになり、それから後にトリオを結成した方が現実的に思っても仕方あるまい。

◆空前絶後の審査員団

一般論はここまで。ミュンヘンである。この大会、なによりも審査員の顔ぶれが尋常ではなかった。

まずはヴァイオリン。興味深いのは、前回のミュンヘン大会ピアノ三重奏部門で優勝したテツヒラー・トリオのエスター！



第2位のファン・ハーレルトリオは既にキャリアを始めているオランダの団体。聴衆を巻き込む力は圧倒的で、聴衆賞も獲得。

ホッペの名前だ。前回や前々回の覇者が早速審査員席に座るのは、ミュンヘンやボルチアーナなどヨーロッパの室内楽大会では珍しくないが、日本ではちよつと考えられないかも。ボロディンQの伝説のチェリストのベルリンスキーの弟子で、今はウィーンを中心にピアノトリオの活動を行うボリス・クシユナー。フランス人ジャン・マルク・ワイリップ・ヴァルジャベディアンは、現役では日本で最も名の知られたピアノ三重奏団のひとつ、トリオ・ヴァンダラーのメンバーを務める。

チェロの二名も強力だ。ひとりにはベルリンフィルの首席チェロ奏者マーティン・レール。初回大阪国際室内楽コンクール第二部門の覇者で、史上唯一の大阪とメルボルンを共に制覇した団体であるトリオ・ジャン・ポールのチェリスト。もうひとりには、グリーンハウスを継いでボザール・トリオの二代目チェリストを務めたメネセス。ちなみにメネセスはミュンヘン大会チェロ部門最高位獲得者でもある。

ピアノは、フロレスタン・トリオの創設メンバーだったスーザン・トーマス、そして審査委員長も兼ねる室内楽ピアノ界の生き神様、御年九十歳でしっかり現役の鉄人、ボザール・トリオのメナハム・プレスラー。ピアノ三重奏を知り抜いた者だけを集めた空前絶後の審査員団である。



同じく第2位とファジル・サイの新作最優秀演奏賞を獲得したフランスのトリオ・カレリーナ。派手さはないが安定感のあるアンサンブルだ。

◆そして結果は

三日間に渡り行われた二次予選の課題曲は、ハイドンの所謂後期作品と、第一番を除くブラームスのピアノ三重奏をそれぞれ一曲づつ。四十分を越える大きなステージだ。筆者は最初の六団体を聴けなかったものの、このステージのポイントは明快。ミュンヘン大会に

参加する音楽家ともなれば、個々人の技巧はあつて当然。達者さを全面に押し立て、ハイドンの楽譜を力任せに弾き倒すような演奏は、軒並み退場を命じられる。筆者の聴いた限り、ハイドンで納得のいく演奏を聴かせたのは前回のミュンヘンのヴァイオリン部門で第二位となったウィーン留学中の白井圭が率いるシユテファン・ツヴァイク・トリオだけだった。

十団体が残された二次予選は二日に分けて行われた。大阪やメルボルンなどの遠隔地なら、この時点から試合がスタートするところである。ドイツ人による団体が二次で壊滅となり、朝から音楽院ホール前に並び無料入場券を手に入れようと必死な地元ご隠居聴衆は大いに不満のよう。既にキャリアのある有力団体、アンサンブルとしての熟練度はまだまだだがきちんとした地力のある団体、特徴の明快な団体などが次々と登場しては、モーツァルト、ロマン派、二十世紀作品を披露する。アンサンブルとしての熟練

度の低さや個性に偏りがみられた団体は、どんなに聴衆が熱狂しようがここで終戦。日本からのアーク・トリオがこのステージまで来たのは大健闘だろう。

準決勝は、ラファエル、シユテファン・ツヴァイク、カレリーナ、アタナソフ、ファン・パールの五団体。優勝候補と目されていたブッシュアンサンブルが消えている。二次予選の翌日という厳しい日程、それにベーター・ヴェンの作品七十と新作、ラヴェルと並ぶ演目は極めてトリッキー。演奏会でなら並べないような特徴ある楽譜のオンパレードである。前回のメルボルン大会の覇者トリオ・ラファエルは疲労が出たか、精彩を欠く演奏で落選。ウィーン風の空気を醸し出せていた白井圭の団体もラヴェルの説得力が今ひとつで、残念ながら本選に進めなかった。個人的にはこの団体のシューベルトが聴きたかったのだが。

二日を空け開催された本選、進出を許されたのはカレリーナとファン・パールのみ。ヘンツェの初期の作品と、



審査員団を率い講評をするプレスラー審査員長。

奏は極めて難しい、今回は優勝に値する演奏なし」という宣言が全て。両団体が二位を分け合うこととなる。

二十世紀の「優勝を出さないミュンヘン大会」を思い出させる厳しさに会場は意気消沈気味だったことは確かだが、少なくとも各ステージを聴いてきた限り、審査員団の下した結論に異論はない。そう、あらためて知る。ピアノ三重奏は本当に難しい。



磯崎新氏設計の京都コンサートホール

JR京都駅から市営地下鉄烏丸線で約十五分、伝統的な町並の京都市中心部とは対照的な景観の洛北を東西に走る北山通りに位置する北山駅のすぐ南にあり、重厚さとモダンさが入り混じった不思議な雰囲気漂わせる京都コンサートホールこそ京都市交響楽団(以下、「京響」という)の本拠地である。

専務理事で事務局長の尾本恵二氏、事務局次長の杉田浩章氏、シニアマネージャーの張田和宏氏から「忌憚のないお話をお聞きした。なお、今回からタイトルを「楽団探訪」とした。

二か月後の六月十八日には先斗町歌舞練場での披露演奏会。翌十九日には円山公園野外音楽堂での演奏会を開催、これを今後続く定期演奏会の第一回としている。先斗町という、円山公園といい場所、時期ともに「京都」の風情が匂い立つ思いを深くする。

演奏会活動など

活動の基本となる演奏会は「月々十一月の毎月一回開催の定期演奏会」で、今年最後の十二月には実に五百七十四回を数えることになる。毎年十二月には付属の合唱団である「京響コーラス」とともに第九コンサートを開催し、年明けの一月には「ニューイヤーコン

サートを行っている。今年度は東京、大阪、名古屋でも演奏会を行う予定がある。過去にはヨーロッパ公演、CDの制作なども行ってきた。

このように多忙なスケジュールの合間を縫うように多彩な催しがある。

初期には「モーツァルトの京響」とも言われてきたが、近年では平成十五年度に西日本で初めて「こどものためのコンサート」に取り組み平成二十一年度から「オーケストラ・デイスカバリー」としてリニューアルし、ガレッジセールやロザンといった人気芸人と出演者とのわかりやすいお話をまじえた進行が好評を博している。平

成十六年度からは「みんなのコンサート」で市内の文化会館などを回り、広く聴衆に音楽の素晴らしさを伝えることにも努めている。平成十八年度には創立五十周年を祝いシェーンベルク「グレの歌」京都初演、国内七都市へのコンサートツアー、「おでかけコンサート」などで成功を収めた。また、楽団員により結成されたアンサンブルが京都コンサートホールなどで室内楽の演奏会を行っている。

クラシックを含む音楽を「芸術レベル」に留め置くことなく、「市民生活レベル」で広く楽しめることに意を注いでいる思いの深さが感じられる。

指揮者たち

現在の楽団は平成二十年四月に第十二代の常任指揮者に就任した広上淳一、前任の常任指揮者であった大友直人が桂冠指揮者となり演奏活動を行っている。

歴代の常任指揮者は初代のカールチェリウス以降、ハンスヨアヒム・カウフマン、森正、外山雄三、渡邊暁雄、山田雄、フルヴィオ・ヴェルニツィ、小林研一郎、井上道義、ウーヴェムント、大友直人(現桂冠指揮者)と錚錚たる名前が並ぶ。

平成二十二年四月以降、運営が京都市から公益財団法人京都市音楽芸術文化振興財団に移管されているが、現在八十五名いる団員は京都市嘱託職員の身分を有しており、引き続き京都市からの補助を受けて運営されている。

楽団運営の現状

これまでの取材では楽団運営の苦勞、とりわけ資金面での窮乏を少なからず耳にしてきた。今回は楽団の成り立ち故か、実に鷹揚な話の流れとなった。

費用の面で重圧となる人件費は市からの支援があり、ほかに芸術文化振興基金からの支援、民間企業からの助成・協賛も受けている。そして本業の公演収入は、いずれの公演においても好評で、毎回ほぼ満席状態にあり極めて順調とのことである。

平成二十八年(二〇二六年)には創設六十周年を迎える。それに対する構想は現在検討段階とのことでお聞きできなかったが、古都京都の老舗の楽団として六十年間の来し方と行く末を睨んだ秘策を憶測しながら京都コンサートホールを後にした。

祇園祭直後の町はことのほか暑かった。(文中、敬称略)

「グランプリ・コンサート2012」を終えて モーフィン・クアルテット



モーフィン・クアルテットは、大阪国際室内楽コンクール史上最も若くして優勝したフランスのサクソフォン四重奏団です。彼らは第五回の第二部門で優勝した「ハバネラ・サクソフォン四重奏団」の大学の後輩にあたり、先輩が優勝したコンクールで優勝するために脇目もふ

らずに練習したと語っており、今回の「グランプリ・コンサート2012」では各地の担当者の方々の協力で、多くのお客様にご来場頂くことができました。特に熊本会場では、当日券を求めらるお客様が予想以上に多く、急遽パイプ椅子を並べて対応するという嬉しい事態まで起こりました。その後行われたサイン会では終了まで二時間半程かかりましたが、彼らも心地よい疲労感に満足している様子でした。

普段モーフィン・クアルテットはクラシック以外でも演奏活動を行なっているということもあり、舞台演出には非常に気を使っています。コンサート前の三時間リハーサルのうち二時間は照明の打合せに費やされ、細かい位置や微

妙な色に至るまで、納得するまで照明担当者と話し合っていました。

コンサートの演奏曲は、コンクールで話題となった転倒パフォーマンスのある、「ミステリアスモーニングII」(作曲・棚田文

紀)や、最後にヴォイス・パーカッションを披露する「パッチワーク」(作曲・P・ガイス)、アンコールでのシャンソンメドレーなど盛りだくさんの内容となり、彼らに今回のグランプリ・コンサートを終えての感想を聞いてみたところ、「各地のコンサート会場の運営の素晴らしさに感動した事や、日本人の優しさやおもてなし、そして西洋人を魅了する全く異なる文化に感化され、今後の演奏活動にも影響を与える事になった。」と答えました。ツアー中も美しい自然や、道にゴミの無い美しい町並みを見て、彼らはとても日本という国を気に入ったようでした。そして「またこの国でコンサートをやる！」という新たな目標を掲げて帰国しましたので、早い段階でまた皆様

日時	公演名	会場
11月 2日(金)	札幌	STVホール
4日(日)	熊本	益城町文化会館
6日(火)	大分	別府大学大分キャンパス
8日(木)	広島	庄原市民会館
10日(土)	三重	三重県文化会館小ホール
12日(月)	大阪	大阪芸術大学3号館ホール
13日(火)	大阪	いずみホール
15日(木)	高岡	富山県高岡文化ホール
17日(土)	東京	津田ホール
20日(火)	松本	松本市波田文化センター

従来「グランプリ・コンサート」のリピーターの方々から吹奏楽のクラブ帰りの中高生に至るまで満足頂けるコンサートとなりました。





公益財団法人日本室内楽振興財団 支援企業

大阪ガス株式会社
関西電力株式会社

三洋電機株式会社
住友電気工業株式会社
ソニー株式会社
株式会社東芝
日本電気株式会社
パナソニック株式会社
株式会社日立製作所
富士通株式会社
ローム株式会社

株式会社近畿大阪銀行
三井住友信託銀行株式会社
株式会社みずほ銀行
株式会社三井住友銀行
株式会社三菱東京UFJ銀行
株式会社りそな銀行

住友生命保険相互会社
東京海上日動火災保険株式会社
日本生命保険相互会社
三井生命保険株式会社

野村証券株式会社

アサヒビール株式会社
サントリーホールディングス株式会社
ハウス食品グループ本社株式会社

東洋紡績株式会社
株式会社ワコール

伊藤忠商事株式会社
岩谷産業株式会社
株式会社千趣会
三菱商事株式会社

川崎重工業株式会社
株式会社クボタ
新日鐵住金株式会社
ダイキン工業株式会社
日立造船株式会社
三菱重工業株式会社

株式会社日建設計

株式会社大林組
鹿島建設株式会社
株式会社きんでん
株式会社鴻池組
清水建設株式会社
大成建設株式会社
大和ハウス工業株式会社
株式会社竹中工務店

非破壊検査株式会社

大塚製薬株式会社
住友化学株式会社
積水化学工業株式会社
武田薬品工業株式会社
日本ペイント株式会社

近畿日本鉄道株式会社
京阪電気鉄道株式会社
南海電気鉄道株式会社
西日本旅客鉄道株式会社
阪急電鉄株式会社
阪神電気鉄道株式会社

株式会社JTB西日本
株式会社電通
株式会社ニュー・オータニ

KDDI株式会社
西日本電信電話株式会社

株式会社読売新聞東京本社
株式会社読売新聞大阪本社
日本テレビ放送網株式会社
読売テレビ放送株式会社

(関連業種別50音順)

■ ミュンヘン断章 ■

ミュンヘンはドイツ南東部のバイエルン州の州都で、ベルリン、ハンブルクに次ぐドイツ第三の都市である。この町の名を聞いて、連想ゲームのように浮かぶのはビール。ビールは1589年に建設された国立の醸造会社であるホフプロイハウスによって生産が始まったという。町の創建は1158年。塩の交易、貨幣の鑄造などで発展を遂げ、今では金融、出版などの中心都市としての顔を持つ経済活動の盛んな都市となり、市域の人口は140万人に達している。町の中心部にはマリエン広場があり、そこにはゴシック様式の新庁舎の尖塔が天高くそびえている。塔の正面では毎日決まった時刻に約10分間、等身大のピエロ、音楽隊の行進、騎士の戦闘、オケ職人の踊りなどが機械仕掛けで動き、「とき」を打つ鐘の音とハーモナイズする。また、新庁舎の間近にはミュンヘン最大のゴシック建築で、アヴェック時計で有名な聖母教会(フラウエン教会)が聳えている。

1952年に始まったミュンヘンARD国際音楽コンクールは、今年で62回を数え、歴史と伝統のある難関なコンクールとして世界の耳目を集めている。今年の模様は本号で渡辺和氏が詳しく紹介してくれている。ヨーロッパの文化の中心をなす町で、多くの異才が生まれ、暮らし、過ぎていった。音楽家ではリヒャルト・シュトラウス、モーツァルト、グスタフ・マーラーなどがいた。

音楽のみならず、文学、絵画等の分野でも数多の芸術家の息吹を残す町である。(表紙:ミュンヘン)



新市庁舎の仕掛け時計



平成25年度 第1回理事会開催



理事会

平成25年度第1回理事会が、平成25年6月10日(月)ホテルニューオータニ大阪で開催されました。冒頭、秋山会長の挨拶があり、その後、越智理事長が議長となって平成24年度の事業報告及び決算報告が審議され可決承認されました。また、平成25年度定時評議員会の招集と議題についても可決承認されました。

会議の終わりに堤剛音楽理事より来年、第8回の「大阪国際室内楽コンクール&フェスタ」が行われるが、回を追うごとに知名度が上がり、出演者の技量の向上に寄与していることは大変喜ばしいとのあいさつがありました。

平成25年度 定時評議員会開催



評議員会

平成25年度定時評議員会が、平成25年6月28日(金)ホテルニューオータニ大阪で開催されました。冒頭の越智理事長の挨拶に続き、評議員の互選で、村上仁志評議員が議長に選出され、先の理事会で承認された平成24年度の事業報告及び決算報告が可決されました。また、評議員2名の選出についても可決承認されました。

会議の終わりに梅本俊和音楽評議員より「大阪国際室内楽コンクール&フェスタ」はすでに世界レベルの水準に達していて、第8回への期待感が大いに高まっているとのあいさつがありました。

新たに選出された評議員は次の方々です。

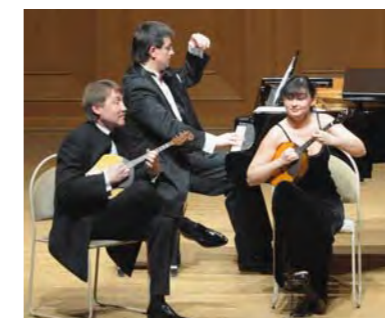
評議員 山下 正文(清水建設)
西川 恵三(日本電気) (敬称略)

グランプリ・コンサート2013

トリオ「国境なきクラシック」(ロシア)

Trio "Classic Without Borders"

メンバーは全員ロストフ州立ラフマニノフ音楽院を卒業。バッハ、メンデルスゾーン、チャイコフスキー、シュニトケといった交響曲作品を、自らの手で編曲しレパートリーとしている。世界28カ国146組の応募のあった第7回大阪国際室内楽フェスタでは、予選・本選とも一般審査員の圧倒的な支持を受けて優勝した。この度のグランプリ・コンサート2013のプログラムには、普段聞くことの出来ないロシア民族楽器を使ったクラシック曲を前半に、後半は皆様ご存知の「一週間」「トロイカ」などのロシア民謡が予定されている。



■開催日程■

札幌	10月31日(木)	STVホール
熊本	11月2日(土)	益城町文化会館
広島	11月4日(月)	庄原市民会館
大分	11月6日(水)	別府大学大分キャンパス
鳥取	11月8日(金)	鳥取市文化ホール
東京	11月10日(日)	津田ホール
大阪	11月12日(火)	いずみホール
三重	11月15日(金)	三重県文化センター小ホール
金沢	11月18日(月)	石川県立音楽堂邦楽ホール
高岡	11月20日(水)	高岡文化ホール

■全国共通■

- 主催/ 公益財団法人 日本室内楽振興財団
- 協賛/ **ダイワハウス・TOYOTA**
- 助成/ 公益財団法人 ロームミュージックファンデーション
- 協力/ 野村証券株式会社
- 後援/ ロシア文化フェスティバル2013 IN JAPAN

歴史ある古い街、人との新たな出会い 知らなかった自分から知る自分へ

立ち寄ったこの街は、
テレビで見たことある美しい風景以上に
雑多で生活感にあふれ、人々の活気でやかましいほど
躍動感いっぱいです。

感動は、頭の中でするものではなく
体にある感覚全体で楽しむもの。

旅は世界へ広がる人とのコミュニケーション。
私たちJTBは、楽しさに出会える
特別な旅のお手伝いをいたします。

JTB西日本
海外旅行西日本支店

〒541-0058 大阪市中央区南久宝寺町3-1-8(本町クロスビル9階)
TEL.06(6252)2711(代) FAX.06(6252)2790
担当：飛松 智久